

# 保幼小連携の課題に関する一考察

— 私立幼稚園、認定こども園へのアンケート調査の分析から —

鈴木 まゆみ

A study on the issue of cooperation between nurseries, kindergartens and elementary schools : Analyzing the survey results of private nurseries and kindergartens

Mayumi SUZUKI

## 1. 研究の背景と目的

子どもを育む環境の課題は多様である。中でも小学校1年生のクラスが崩壊状況にあるという「小1プロブレム」<sup>1</sup>が指摘され、家庭、保育園、幼稚園、認定こども園、そして小学校との連携が年々重要視されてきている。この間、家庭と園、小学校の連携は、相互に訪問したり、イベントを開催したりするなどの実践が増え、子どもたちや保育者、教員との交流が実施されている。しかし、小学校1年生への移行に向けてのアプローチカリキュラムと入学後のスタートカリキュラムの開発は各都道府県により異なり、<sup>2</sup>全国統一の汎用可能な公的プログラムや基準は存在しない。<sup>3</sup>そのため、小学校1年生のクラス担任は、就学前の保育所、幼稚園での子どもたちの教育内容や家庭での経験に関わる情報が均一ではない状況で授業の計画を立て実施している。

中でも、私立の幼稚園、保育園、認定こども園においては、広範囲の学区より子ども達が通園しているため、同じ敷地内に隣接している公立の園と小学校のような連携は難しく、より一層の工夫が求められている。このことから、子どもが育つ環境は、住んでいる地域や通っている園、進学する小学校によって多様であり、保幼小の連携に関しては偏りがあることが窺える。平成29年3月の幼稚園教育要領の改訂においては、幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」<sup>4</sup>が明示された。<sup>4</sup>それらは、遊びを通しての総合的な指導であることが再認識されているが、小学校教育のスタートにおいてどのように連携し、活かされているのだろうか。

本研究においては、このような子どもを取り巻く社会的背景をふまえ、私立幼稚園、認定こども

園の保育者が保育現場において保幼小の連携をどのように捉えているのかに焦点をあてる。筆者は、平成29年度A県における私立の幼稚園・認定こども園連合会研修会の分科会『子どもが育つ家庭や環境～他機関との交流、接続、連携からの支援～』において助言者を担当したが、研修内容の課題が明確化されるよう分科会参加園(者)に事前のアンケートを実施した。その自由記述型のアンケートは23園と少数であるが、A県の私立の幼稚園、認定こども園における保育者の生の声が反映された貴重な内容であった。そのため、全体的な傾向を捉える他研究の比較として、保幼小の連携に関心のある私立の幼稚園、認定こども園の保育者のみからのアンケートは有用であると考えられる。よって本研究においては、私立の幼稚園・認定こども園連合会研修会の分科会参加園(者) 23園の事前アンケートの分析から、保幼小の連携の現状と課題を分析し考察することを目的とする。

## 2. 研究の方法

本研究は、私立の幼稚園・認定こども園への保幼小の連携に関するアンケートから現状と課題を分析していく。ここでは、アンケートの概要とアンケートの分析方法について述べる。

### (1) アンケートの概要

#### ①対象者

平成29年度A県における私立幼稚園・認定こども園連合会の研修会における分科会『子どもが育つ家庭や環境～他機関との交流、接続、連携からの支援～』の参加者(88名)

#### ②調査方法

アンケート(A 4判1枚)を私立幼稚園・認定こども園連合会の協力を得て、ファックスにて送信し、保幼小の連携の内容について回答してもらった。

項目に対しては、各園の現状が記入しやすいよう自由記述式で依頼した。アンケートは無記名での記入となっており、研修会や研究の目的のために使用し、個人情報に留意することを明示した。1園の中には、複数の参加者がおり、記入者については各園の判断に委ねた。

その結果、調査は依頼から2週間の期間に郵送、Eメール、ファックスにて回答を得ることができた。回答園数は、34園中23園で回収率は68%であった。

#### ③アンケートの項目

アンケート項目については、分科会の運営責任者や司会の幼稚園教諭からアドバイスを得て下記のように設定した。

A 4判の記入用紙に、現状と課題の2項目について提示し、現場の多様な状況が記入しやすいよ

アンケート用紙

<p style="text-align: center;"><b>保幼小の連携について</b></p> <p>1. 貴園の保幼小の連携の現状について箇条書きでご記入ください。</p>  <p>2. 貴園の保幼小の連携について課題点があれば、箇条書きでご記入ください。</p> <p>(1) 小学校、地域などへの要望</p>  <p>(2) 自園の課題点、その他</p>
---

う自由記述式とし、園、保育者、子どもの名前は記入せず回答してもらった。

(2) アンケート調査の分析方法

アンケート調査は、質的な分析を行うためKJ法を使用した。ただし、数的な傾向を明示する場合、必要に応じてグラフ化されたデータも併用した。

KJ法は「文化人類学の分野で川喜田二郎が考案した研究法」(田中、2011)<sup>5</sup>で、心理学や看護学など多様な領域に应用されているだけでなく、教育学分野でも分析手法が応用されている。「渾沌をして語らしめる」(川喜田、1996)<sup>6</sup>という表現が示すように、一見無秩序に見える定性的データをグループにまとめ、グループ間の関係を図解化、文章化することにより、問題の本質を追求したり新しい発想を得たりするという点で、質的研究への応用範囲の広い手法である。

特に「新しい発想を得る」という面においては、仮に元データが同一のものであっても、グループ化、図解化、叙述化のそれぞれの段階で分析者が何を感じたかということによって分析結果自体

もその解釈も異なることがあり得る。そのため、結果だけではなくどのようにその結果に至ったかを叙述し、分析のプロセスを開示することが重要となる。(中西, 2011)<sup>7</sup>

本研究における分析の手順は、下記のようにラベル作り、グループ編成、図解化、叙述化の4段階で進めた。

#### ①ラベル作り

名刺程度の大きさのカードに、アンケートの記述内容から、1つのメッセージ性(意味のかたまり)をとらえた内容を記入し通し番号をふった。

番号は、1～453までとなった。

#### ②グループ編成

- ・ラベル拡げ：ラベルをランダムに並べた。
- ・ラベル集め：すべてのラベルをなんらかの順番で読み通し、同類のものをセットにし近くに置いた。この際、川喜多によればセットにならないものが残ってもよいとされている。
- ・表札作り：核融合法

上記の作業を行い、小さいグループを何度も作成し、最終的に6つのカテゴリーのグループに絞り込んだ。6つのカテゴリーのグループは、2つのコアカテゴリーにグルーピングされた。

#### ③図解化

最終的に残ったラベルの束だけを使い、解釈しやすい順番に配置した。さらに、それぞれの表札をグループ化し、関係性を示した。

#### ④叙述化

図解から分かった内容と新たな発想について記入した。個々のグループの図解化を行い、その意味連関を総合的に解説した。

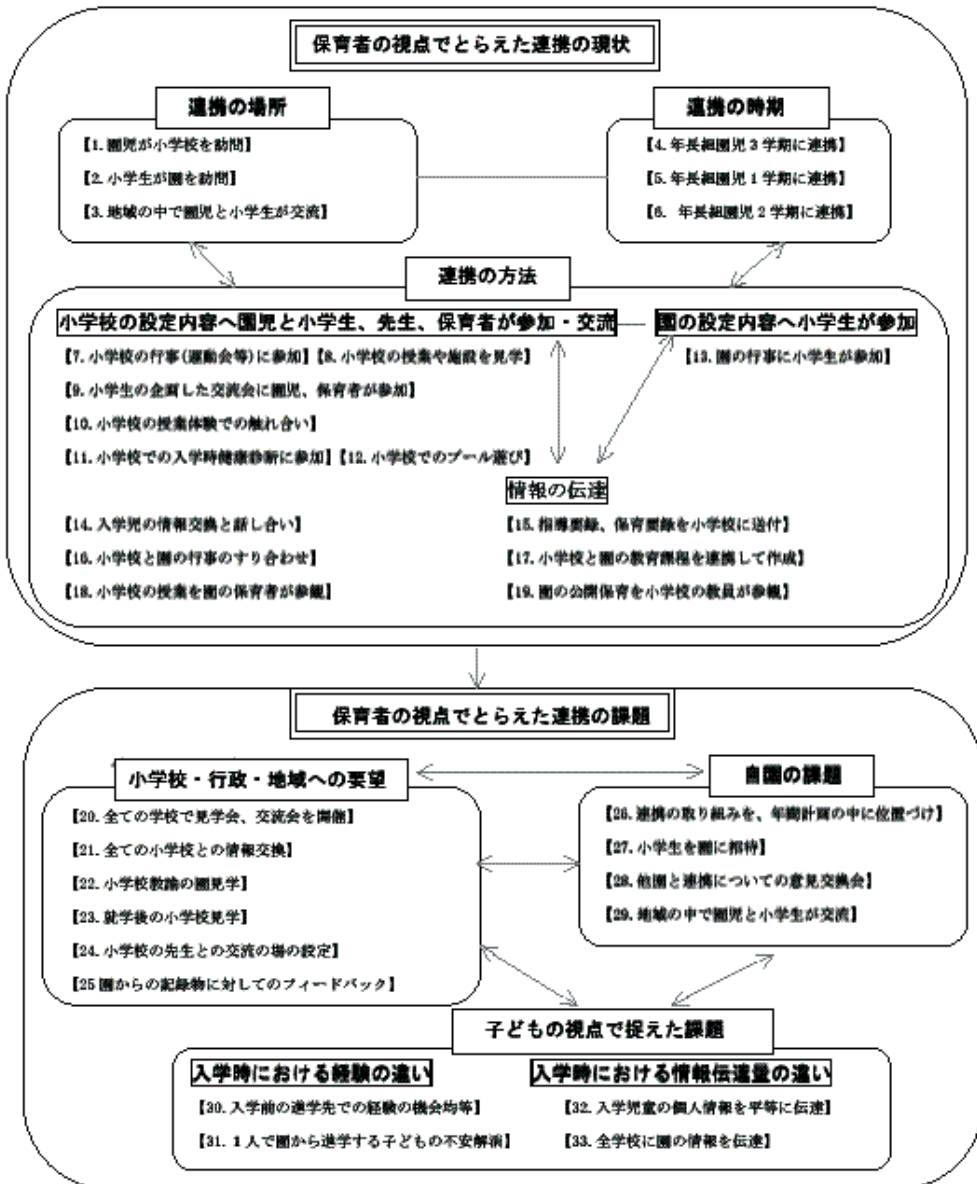
以上のように、本研究では、テキストの重層化プロセス(高橋, 2011)<sup>8</sup>を分析し、その際必要に応じて数的データも提示して考察をした。

### 3. 研究の結果

最終的に残った33のラベルの束を使い、解釈しやすい順番に配置した。さらに、それぞれの表札を9つのグループに分け、関係性を検討した。その結果、6つのカテゴリーが浮上し、最終的には2つのコアカテゴリーが見出された。

研究の結果としては、その結果を図で示すと共に、叙述化して図の内容を文章で提示する。

図1. 「保幼小の連携の現状と課題」



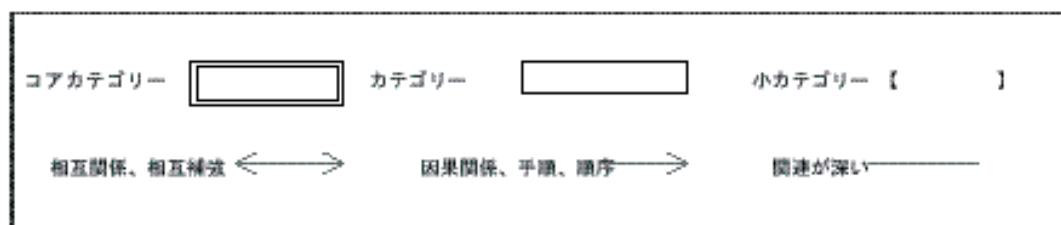


図1の叙述内容

保育者の視点でとらえた連携の現状は、**連携の場所、時期、方法**の3点から捉えることができた。

**連携の場所**は、【1.園児が小学校を訪問】が圧倒的に多く、次いで【2.小学生が園を訪問】【3.地域の中で園児と小学生が交流】の順であった。数的に最も多かったのが、小学校であり、保育者の捉えた連携は、多くが小学校を環境として展開されていることがわかった。

**連携の時期**は、最も多かったのが【4.年長組園児3学期に連携】であり、次いで【5.年長組園児1学期に連携】【6.年長組園児2学期に連携】の順であった。これは、3月期が小学校進学を目前にした準備、動機づけとしての位置づけが定着していることが窺える。また、園児の2学期が充実期であり、運動会や遠足、発表会など大きな行事への取り組みにカリキュラムの時間が配分されていることも要因としてあげられる。

**連携の方法**は、**小学校の設定内容へ園児と小学生、先生、保育者が参加・交流と園の設定内容へ小学生が参加、情報の伝達**の3つの方法を捉えることができた。

参加の方法を比較すると、**園の設定内容へ小学生が参加**は1園のみで、その他全て、**小学校の設定内容へ園児と小学生、先生、保育者が参加・交流**であった。多数を占めた**小学校の設定内容へ園児と小学生、先生、保育者が参加・交流**の内容は、【7.小学校の行事(運動会等)に参加】【11.小学校での入学時健康診断に参加】が3割近くを占め、次いで【8.小学校の授業や施設を見学】【9.小学生の企画した交流会に園児、保育者が参加】【10.小学校の授業体験での触れ合い】【12.小学校でのプール遊び】【13.園の行事に小学生が参加】などがあげられた。保育者は、設定された場に参加する方法として交流の有無を書き分けており、参加形態を重要だととらえていた。**情報の伝達**については、【14.入学児の情報交換と話し合い】【15.指導要録、保育要録を小学校に送付】【16.小学校と園の行事のすり合わせ】【17.小学校と園の教育課程を連携して作成】【18.小学校の授業を園の保育者が参観】【19.園の公開保育を小学校の教員が参観】をあげており、いずれも学校により統一されていないことが解り、そのことについての対策が困難であるという現状であった。

保育者の視点でとらえた連携の課題は、**小学校・行政・地域への要望と自園の課題—子どもの視点で捉えた課題**の3点を捉えることができた。

**小学校・行政・地域への要望**は、【20.全ての学校で見学会、交流会を開催】【21.全ての小

学校との情報交換】【22.小学校教諭の園見学】【23.就学後の小学校見学】【24.小学校の先生との交流の場の設定】【25.園からの記録物に対するフィードバック】という内容であった。学校によって様々な対応であることへの改善を図るために、小学校・行政・地域へアプローチを図っている。

**自園の課題**は、【26.連携の取り組みを、年間計画の中に位置づけ】【27.小学生を園に招待】【28.他園と連携についての意見交換会】【29.地域の中で園児と小学生が交流】と捉えている。ある地域では、保幼小の連携を、教育課程・保育課程の中に位置づけ、小学校や他園、地域とのコミュニケーションから得られた情報の伝達により、より良い実践の在り方への改善を模索していた。

**子どもの視点で捉えた課題**は、核融合化の中で、KJ法の発想から生まれたものである。**子どもの視点で捉えた課題**は、**入学時における経験の違いと入学時における情報伝達量の違い**の二つがあげられた。**入学時における経験の違い**は、【30.入学前の進学先での経験に偏り】【31.一人で園から進学する子どもの不安】の二つであり、保育者の視点から見ると一人ひとりの子どもの経験の違いが把握できているため入学時の課題の見通しがあり、一人で進学する子どもの不安が共感できている。また、**入学時における情報伝達量の違い**についても、送り手側の保育者は、全ての子どもに【32.入学前の進学先での経験の機会均等】や【32.入学児童の個人情報等を平等に伝達】したいと考えており、【31.一人で園から進学する子どもの不安】を解消するためにも【33.全学校に園の情報を伝達】したいと考えていることがわかった。

#### 4. 考 察

結果の図と叙述内容から得られた保幼小の連携の現状と課題は、6つのカテゴリーを含む2つのコアカテゴリーとして捉えられた。ここでは、2つのコアカテゴリーについて考察していく。

##### (1) 私立幼稚園・認定子ども園の保育者がとらえた保幼小の連携の現状

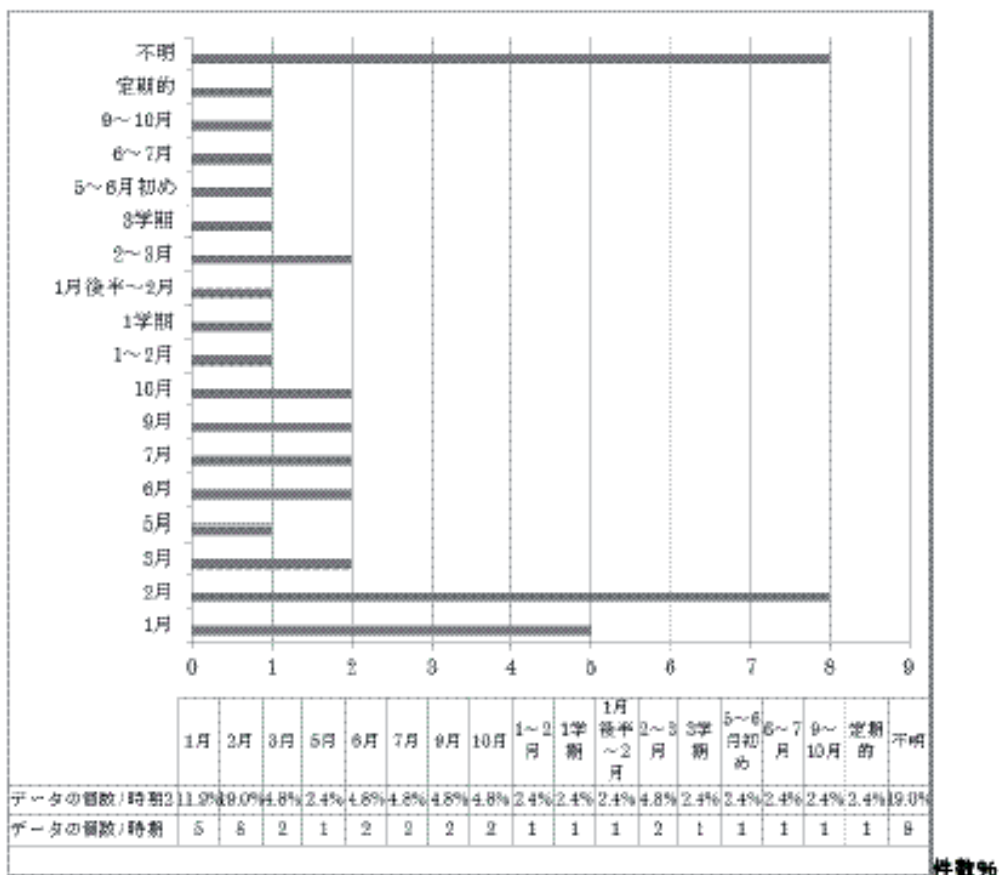
保育者の視点でとらえた連携の現状は、連携の時期、場所、方法、の3点から構成されていた。時期と場所については、数的分析も併用して考察する。

##### ①保幼小の連携が実施されている時期

保幼小の連携が実施されている時期は、図2からもわかるように、2月の時期が19%と最も多く次いで1月の11.9%となっている。

1月～3月の時期と捉えれば3学期に50%の実施が行われており、私立の幼稚園、認定こども園においては、小学校入学への意識が高まる3学期に、子どもたちに効果的な動機づけを伴う実践が行われることが推測される。

図2. 保幼小の連携が実施されている時期



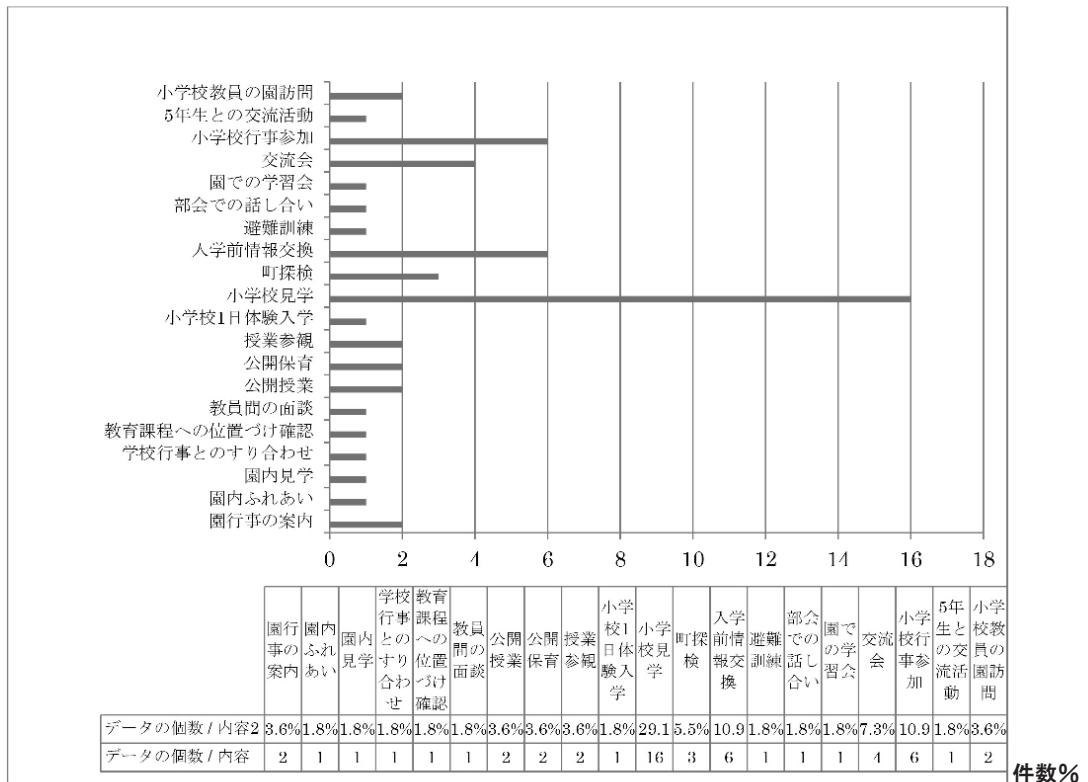


②保幼小の連携で実施されている内容（方法、場所）

上野（2007）は、保幼小連携の取組として、「①情報交換（懇談会、相互訪問、参観など） ②実践交流（合同行事、合同授業の実施など） ③実践検討（内容、方法、子ども理解など） ④子どもが獲得すべき能力の明確化とカリキュラム編成 ⑤実践分析に基づいた連携カリキュラム編成とその改訂などが考えられる」としている。これは一般的に研究の中ですみ分けされている項目であるが、今回、保育の現場からボトムアップ的に吸い上げた記述内容は、活動名として記入されていることが大半であったため、図3においては、アンケートの記述内容をそのまま残してグラフ化した。

図3からもわかるように、保幼小の連携で実施されている内容は、小学校見学が29%実施されており、次いで小学校行事参加、情報交換会が10%実施されている。また、公開保育、公開授業3.6%も実施されており、開かれた教育現場としての取り組みへの改善が期待される。また、教育課程への位置づけ1.8%も行われており、今後、他園においての広がりの方角に注目したい。

図3. 保幼小の連携で実施されている内容



### ③小学校入学前の子どもへの対応（受動型と交流型）

グループ作成を何度か行う中で、年間計画に見る学期の区切りと、連携の内容が交流型か参加型であるのかが浮上した。そのため、KJ法による重層化プロセスの核融合化の前段階を図4に示した。

まず、生活の区切りである学期ごとの傾向を見ていくと、1学期26%の連携内容は、運動会への参加が多く、他にはプール遊びの合同体験や小学校の先生が園に来て授業を受ける体験であった。2学期16%の連携内容は、小学校見学、健康診断、鼓笛隊パレードの見学となっている。3学期は58%と全体の6割弱を占めるもっとも多くの内容が実施されており、小学校見学、授業参観への参加となっている。次に、小学生や小学校の教員との交流の有無の数的分析を試みた。その結果、全体の割合を見ると、受動型が58%、交流型が42%となっている。

保幼少連携プログラムにおける交流の重要性については全国的な傾向であり、先進的な取り組みとしては、高知県南国市の事例があげられる。南国市では、平成26年1月に南国市保幼小連携プログラムを発行し、平成26年4月から南国市全ての保育所・幼稚園と小学校がこの連携プログラムに基づいて連携を図っている。柱となるのは、保幼小連携モデルプラン<sup>10</sup>であり、中心となる取組は次の二つである。

一つ目は、教育をつなぐという保幼小接続期のカリキュラムの実施で、小学校側はスタートカリキュラム、保育所・幼稚園側は年長時の後半からアプローチカリキュラムを南国市全体で実施している。小学校のスタートカリキュラムは、モデルプランの実施に際し、スタートカリキュラムの冊子を全部の小学校に配り、全ての小学校1年生に対して4月から5月にかけて、全52時間の指導案に基づいて実施している。また、保育所・幼稚園側のアプローチカリキュラムとしては、基本となるものが南国市保幼小連携プログラムに掲載されており、各園・所で実態に応じて作成し実施している。

二つ目は、保育所・幼稚園と小学校の交流活動の充実である。保育所・幼稚園側と小学校側が互いに明確なねらいをもった交流活動をすること。そして、その交流活動を単発的に終わらせるのではなく、継続的な交流をすることを大切にしながら実施している。その他にも、様々な連携の取組内容がプランには含まれており、それぞれの小学校や保育所・幼稚園が工夫をしながら取組を進めている。

一例ではあるが、本アンケート園の所在地の行政機関においても「入学支援シート」等の導入が始まり、家庭、保育園、幼稚園、療育機関等で、子どもの様子や指導の工夫・配慮等を小学校に引き継ぐ工夫が始まっている。「入学支援シート」は、入学にあたり、家庭や保育園、幼稚園、療育機関等で配慮してきたことを小学校に引き継ぐためのツールとして汎用化し、実際の連携に活用されることが期待されている。また、南国市のケースのようにその取り組みが現場に浸透し活用されていくためには、多岐に渡る地域の状況を鑑み、国により全体的な汎用プログラムに通じる教育課

程の時間数等の基本的な基準が明確化されることが必要であると思われる。その適切な提示があれば、各園が保幼小連携の「時期・場所・内容」を目の前の子どもたちの為に選択し、独自のアプローチカリキュラムを工夫することが安定してできるのではないだろうか。

図4. 小学校入学前の子どもへの対応

(核融合化前の表札作成の根拠となったアンケートの記述内容をそのまま表記する)

学 期	受動型 (設定された内容に園児が参加する)	交流型 (参加内容に園児と小学生、先生との交流がある)
1 学期 (26%)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校の運動会に各々招待を受けている。</li> <li>・進学先の春の運動会に参加する。</li> <li>・運動会への未就学児種目への参加をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校のプールで、小学生と一緒にプール活動をする。</li> <li>・学習会 年長 7月…小学校の先生を講師にお招きし、お話をしたり、簡単な実験や顕微鏡を見たりめずらしい石に触れたりして、石や自然への興味、関心を深めている。</li> </ul>
2 学期 (16%)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・9月の小学校の鼓笛パレードを見学する。年長 9月</li> <li>・小学校見学、就学時検診 年長 10月</li> <li>・小学校見学 年長 10月</li> </ul>	
3 学期 (58%)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校見学 (学校訪問) 年長 1月 1年生の授業見学、学校案内</li> <li>・小学校見学 年長 1月後半～2月</li> <li>・小学校見学 小学校の授業を見せていただく (数名参加)。年長 2月</li> <li>・小学校見学 年長 2月。</li> <li>・小学校 1日体験入学 2月</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校見学。校舎内見学、教室、特別教室 (理科室 etc.)。質問コーナー (1年生になる心構え、不安に思っていることなど)。年長 1月。</li> <li>・小学校見学を、毎年2月に年長組が行っている。近くの小学校へ行き、実際に1年生の授業の様子や、図書室、体育館などを見させていただく。また、校長先生から小学校生活について話を聞いたり、子どもたちの素朴な疑問、質問に答えてもらったりしている。</li> <li>・小学校見学 年長 1年生のクラスや授業の見学、学校内の見学。見学当日の日程によっては、小学生と触れ合う時間もある。</li> <li>・小学生との交流活動 2月:小学生の考えた紙芝居を見る。ミニオリンピックを行い、一緒にゲームをする。</li> <li>・小学校見学 年長 2月。1年生が交流の会を開いてくれ、司会進行全て1年生が行う。小学校の質問コーナーやダンスやゲームをした後、1年生と手をつないで校内の見学へ出かける。</li> <li>・小学校見学 年長児と担任 2月 進学する学校を訪問。学校内を見学し一緒に遊ぶ。</li> </ul>
回答割合	19 園回答中 11 園からの回答 (58%)	19 園回答中 8 園からの回答 (42%)

## (2) 保育者の視点でとらえた連携の課題

保育者の視点でとらえた連携の課題は、**小学校、行政、地域への要望と自園の課題**、2点から構成されていた。その根拠となる資料から、着目した点を抜き出し考察する。なお、括弧（ ）内のパーセンテージは23園全体の中の割合を示している。また、下記四角の囲みの項目は、全体の中から選択した課題を記述している。

### ①小学校、行政、地域への要望

#### A. 進学先が複数であることに関する言及 6園/23園 (26%)

- ・特定の小学校との情報交換はしているが、入学予定の小学校全てとは行っていないため、どのような方法で情報交換をすべきか。
- ・全ての学校で見学会、交流会を開いてほしい。
- ・大多数が就学する小学校とは、就学前に園での生活の様子を見学してもらい、担任と小学校の教員が話す機会を設けてもらっている。他の学校でもそのような機会を設けても良い（配慮する点等）。
- ・入学する子どもについて、連絡を下さる学校と下さらない小学校がある為、できればすべての小学校と連絡を取って話し合いたい。
- ・我が園は9～11の小学校へと進学するので、各進学先で来年度1年生を集めた学校見学日があれば、親御さんと出かけていけるのでありがたい。
- ・就学先の先生との情報交換（一部のみ実施）



全ての小学校と密な連携を取りたいと考えており、**進学先が複数であることが子どもにとってデメリットにならないようにという配慮が色濃く反映されている。**

#### B. 小学校への要望 11園/23園 (48%)

- ・小学校の先生に来園してもらい、子ども達の普段の様子を見てほしい。
- ・もっと幼稚園で取り組んでいる教育内容を小学校の先生に知ってほしい。
- ・交流会の内容も子どもたち主体の部分があってもいいのでは？と感じる。
- ・小学校と幼稚園で、連携について話し合いたい。
- ・幼稚園での子どもの様子や取り組みを見学してほしい。
- ・子ども一人ひとりの留意点を伝えたい。
- ・入学後に生活習慣が乱れてしまうという相談が増えているので対応してほしい。
- ・園での年長児の様子も小学校の先生たちに見ていただきたい（発達、先生の関わり方、達成度など）。
- ・幼稚園指導要録を読んでほしい。(2園)



幼稚園での子どもの様子や取り組みを見学してほしいや、子ども一人ひとりの留意点を伝えたいなど、子どもの現状についての理解を小学校側に求めており、連携をしたいという強い願いが表れている。また、指導要録などの記録物の活用についても改善をしたいと考えている。幼稚園での子どもの様子や取り組みを見学してほしい、子ども一人ひとりの留意点を伝えたいなど、子どもの現状についての理解を小学校側に求めている。

C. 小学校との情報交換 4園/23園 (17%)

- ・各小学校から問題行動のある子の確認依頼はあるが、園から伝えておきたいことと、学校が知りたいことの温度差（違い）を感じる。
- ・小学校の様子を知る術が在園の保護者から聞くことしかできていない。教師からも定期的に聞きたい。
- ・学童保育時での相談をなめらかにしていきたい。卒園時の状況は大体わかるが、小学校生活（授業）でのストレスを抱えて帰宅する子どもの様子の変化が著しく、小学校との連携を上手くとりたい。
- ・子ども同士で交流することも大事であるが、教員同士が相互理解を図る場を設け、共通理解を持ちたいと考える。



園から伝えておきたいことと、学校が知りたいことの温度差（違い）を感じ、送り手側と受け取る側の理解が異なり、その改善のために連携して対応していきたいと考えている。

D. その他 12園/23園 (52%)

- ・幼～大人になるまでを見据える教育。
- ・小学生が園に来園する機会はあるが、園児が小学校へ足を運ぶ機会がない為、（就学時検診以外で）就学に向けて園児が小学校へ行くイベントがあっても良いと思う。
- ・公立（併設の幼稚園）であれば、学校行事として組み込まれているなど連携を取ることが容易だが、私立となると、また、こども園となるとそうはいかない。
- ・その年によって行政の方針が違うため、連携の機会が持てる時と持てない時がある。
- ・地域の方の交流の場もバザーくらいしかないのではなかなか地元の方とのふれあいができていない。
- ・小学校児童の移動手段が無く機会を持つことが困難。
- ・特別な配慮の必要な子への連携支援の仕方を理解したい。
- ・小学校のカリキュラムが変更となり、時間数が足りないという理由から交流が減ってしまった。

- 子ども達のためにはもっと小学校へ行く機会を増やしていきたいが、小学校も授業がある為難しいのが現状である。
- 就学先での交流会を持ちたい。
- 地域との交流を増やす。(おじいさん、おばあさんとの関わりが減っている為)
- 小学生が園へ来園することが少ない。



同一敷地内に小学校と併設の公立幼稚園等であれば、環境を共有し、学校行事も連携を取ることが容易であるが私立の場合はそうではない。また、小学校のカリキュラムが変更となり、時間数が足りないという理由から交流が減ってしまった。子ども達のためにはもっと小学校へ行く機会を増やしていきたい。

## ②園の課題

E. 子どもの交流に関して 6園/23園 (23%)

- 年に1回小学校見学はあるが、小学生との触れ合いの機会をもっと多くし、つなげていく必要がある。
- 連携を取るのが就学の前となってしまう慌ただしくなっている。どのように年間計画に取り込んでいくかを検討していく。
- 自園は小学校見学を行っていないので、就学に向けて関心を高めるためにも今後実施を検討していきたい。
- 運動会等には顔を出すのが、小学生との交流の機会がない。



年に1回の小学校見学や運動会への参加だけでは無く、小学生との触れ合いの機会をもっと多くし、つなげていく必要がある。また、ゆったりとした流れの中で、年間計画に取り込んでいく方法を検討する。

F. 複数の進学先への対応 4園/23園 (17%)

- ・進学先がいくつにも分かれているが（市内のほぼ全域から園児が来ているため）全ての学校の情報が細かく入ってこない。
- ・9～11の小学校へ1～数名ずつ進学するので、一人ひとりが小学校へ行ってからも自己発揮をして頑張れるよう、一つでも多く自信を持てることをつくってやること。
- ・就学先が複数になった場合の個々の連携のしかたを検討したい。
- ・様々な地域から園児が来ている為、全ての地域の方や小学校との連携は難しい点があり、1人で入学していくお子さんの不安を解消できないこともある。



進学先がいくつにも分かれている（市内のほぼ全域）ため全ての学校の情報が細かく入ってこない。9～11の小学校へ1～数名ずつ進学するので、一人ひとりが小学校へ行ってからも自己発揮をして頑張れるよう、在園時には、一つでも多く自信を持てる経験をしてもらいたい。また、1人で入学していく子どもの不安を解消したい。

G. 小学校教員との交流 5園/23園 (22%)

- ・園から小学校へ情報交換以外では連絡をすることがないため、より積極的に連絡を行う必要がある。
- ・幼稚園と小学校でどのような連携が図れるか、情報交換だけではなく様々な交流など形を変えて進められるように検討すべきである。
- ・小学校との交流の機会がほとんどない。
- ・小学校と幼稚園の取り組み等をお互い理解し、それを踏まえてどのように連携していくのかを話し合う必要がある。
- ・小学校側が幼稚園の活動を見に来たり、伝える機会を作ったりしたい。
- ・園内行事や子どもの習い事のスケジュールで空いている日がほとんどなく、年間予定が決定してからの交流等の申し出に対応しづらいのでもっと連絡を取り合い改善したい。
- ・同じ市内でも、引き継ぎのある学校、無い学校があるので、統一してどの子の情報も引き継げるようにしたい。



小学校と幼稚園の取り組み等をお互い理解し、それを踏まえてどのように連携していくのかを話し合う必要がある。また、小学校側が幼稚園の活動を見に来たり、伝える機会を作ったりしたい。同じ市内でも、引き継ぎのある学校、無い学校があるので、統一してどの子の情報も引き継げるようにしたい。

#### H. 進学後に関して 4園／23園（17%）

- ・入学後の接続がどのようにされているのか学びたい。
- ・小学生のみで行う（幼稚園主催）行事が無いので、卒園後に小学生が園に遊びに来るきっかけを作りたい。
- ・問題を抱えていた卒園児の授業参観や担任の先生との懇談を行いたい。



入学後の接続がどのようにされているのかについて学びたい。また、幼稚園主催の行事が無いので、卒園後に小学生が園に遊びに来るきっかけを作りたい。さらに、問題を抱えていた卒園児の授業参観や担任の先生との懇談を行いたい。

#### I. その他 5園／23園（22%）

- ・震災後のストレスを抱えているのか、すぐカーッと頭にくると手が出てしまう小学生がいる。その場から離して落ち着かせてから対処しているが、目が離せない。  
（学童保育小学2年生男児）
- ・地域の子育てセンターとしての役割を周知したい。
- ・文字の指導について理解したい。
- ・小学校の生活の流れ、活動などへの関心、興味を高めたい。
- ・職員同士での話し合い等、他園との交流を持ちたい。



学童保育で問題を抱える子どもへの対応や園の地域の子育てセンターとしての役割を周知したい。また、学童保育との連携を取り、震災後のストレス等への対応もしていきたい。

小学校と幼稚園の取り組み等をお互い理解し、それを踏まえてどのように連携していくのかを話し合う必要がある。また、小学校側が幼稚園の活動を見に来たり、伝える機会を作ったりしたい。同じ市内でも、引き継ぎのある学校、無い学校があるので、統一してどの子の情報も引き継げるよ



うにしたい。

### (3) 子どもの視点で捉えた課題

保育者の「子どもの視点で捉えた課題」は、KJ法の分析の中で新たな発想として浮上したカテゴリである。重層化プロセスにおけるA～Iまでの表札作成の根拠となった内容に着目し、カテゴリ発生のプロセスを提示する。

- A. 私立の園で進学先が複数であることが子どもにとってデメリットにならないように。
- B. 幼稚園での子どもの様子や取り組みを見学してほしい、子ども一人ひとりの留意点を伝えたいなど、子どもの現状についての理解を小学校側に求めている。
- D. 「公立（併設の幼稚園）であれば、学校行事として組み込まれているなど連携を取ることが容易だが、私立となると、また、こども園となるとそうはいかない」特別な配慮が必要な子への支援の連携仕方を理解したい。
- E. 小学生との触れ合いの機会をもっと多くし、つなげていく必要がある。
- I. 学童保育との連携を取り、震災後のストレス等への対応もしていきたい。

【30. 入学前の進学先での経験の機会均等】

【33. 全学校に園の情報を伝達】

保育者は保幼小の連携の現状を、子ども一人ひとりの現実から子どもを取り巻く具体的な環境として捉えられている。

子どもの視点で捉えた課題

保育者は、保幼小の連携の課題を、子ども一人ひとりの入学時の見通しから考察している。

【31. 1人で園から進学する子どもの不安解消】

【32. 入学児童の個人情報等を平等に伝達】

- G. 「園から伝えておきたいことと、学校が知りたいことの温度差（違い）を感じる。」
- H. 入学後の接続がどのようにされているのか学びたい。  
問題を抱えていた卒園児の授業参観や担任の先生との懇談を行いたい。
- F. 進学先がいくつにも分かれている（市内のほぼ全域）ため全ての学校の情報が細かく入ってこない。9～11の小学校へ1～数名ずつ進学するので、一人ひとりが小学校へ行ってからも自己発揮をして頑張れるよう、在園時には、一つでも多く自信を持てる経験をしてもらいたい。また、1人で入学していく子どもの不安を解消したい。

## 5. まとめ

本研究においては、私立幼稚園、認定こども園の保育者がどのように保幼小の連携を捉えているのかに焦点をあて、アンケートの分析を行った。その結果、保育者は、保幼小の連携の環境は多様であり、偏りがあることを二つの視点から捉えていた。

一つ目としては、保育者にとって保幼小の連携の現状は、子ども一人ひとりの現実から捉えられていることが解った。例えば、「一人で進学するのに、その小学校と自園は行き来もなく情報交換が薄い。まだ子どもの課題は残っているのに、これまでの育ちはどのようにつながっていくのだろうか。」等というように、子ども一人ひとりの現実に置き換えることで現状の把握をしている。さらに連携は交流型を望んでいるが、一過性の交流に留まらない連携を志向している保育者もみられた。

二つ目としては、保育者にとって保幼小の連携の課題は、子ども一人ひとりの入学時の見通しから考察していることが解った。保育者は、入学してからの一人ひとりの姿を思い描き、その情報を全ての学校に伝達したいと考えている。「全ての小学校と」というキーワードが多かったことが物語るように、保育者は、一人ひとりの子どもが受け取る就学前後の援助が適切で平等であるべきだと考えている。また、私立の園であることで不利益が起こらないようにという園の創意工夫も見られた。

以上のように保育者は、「園児が就学してからのことを意識した保育」を実施したいと考えているが、園児の就学に向け接続期を円滑なものにしようとする取組は、それぞれの園に任されている部分が多い。

今後は、公立、私立双方の園に同様のアンケート調査を実施し、研究を継続していきたい。

## 謝 辞

本研究ノートの作成にあたり、私立幼稚園・認定こども園連合会の皆様にはアンケートにご協力をいただき、貴重なデータをご提供いただきまして誠にありがとうございました。心より御礼申し上げます。

## 引用参考文献

- 1 大伴 潔 渡邊 健治 濱田 豊彦 [他] (2010)

「小1 プロブレムへの対応と課題--幼児期から学齢期への移行を支援するために（社会の変化に対応する学校教育）」学校教育研究所年報（54）PP. 42-57

- 2 研究代表者 渡邊恵子 (2017) (国立教育政策研究所 教育政策・評価研究部長(併)幼児教育センター長)『幼小接続期の育ち・学びと幼児教育の質に関する研究』 <報告書>
- 3 酒井朗・横井紘子 (2011)『保幼小連携の原理と実践』ミネルバ書房.  
秋田喜代美・森俊之・野口隆子・横山真貴子・石山貴章・長尾史英・田中美智子・高梨佳子 (2010) : 「特集 発達心理学の視点でみる保幼小連携の実際」日本発達心理学会ニューズレター
- 4 無藤 隆・汐見 稔幸・砂上 史子 共著 (2017)『ここがポイント！3 法令ガイドブック ―新しい「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の理解のために―』
- 5 田中博晃 (2011)「KJ 法入門：質的データ分析法としてKJ 法を行う前に」より良い国語教育研究のための方法：外国語教育メディア学会 (LET) 関西支部メソドロジー研究部会2010年度報告論集PP. 17～29.
- 6 川喜田二郎 (1996)『KJ 法：渾沌をして語らしめる』中央公論社.
- 7 中西のりこ (2011)「研究の目的に合わせたKJ法の応用」PP. 92～105  
外国語教育メディア学会 (LET) 関西支部 メソドロジー研究部会2011年度報告論集
- 8 高橋菜穂子 (2011)「ある児童養護施設職員の語りのKJ 法による分析―テキストの重層化プロセスからとらえる実践へのまなざし―」
- 9 上野ひろ美 (2007)「保幼小連携の課題に関する考察」教育実践総合センター研究紀要PP. 109～122
- 10 平成28年度 第1回「対話と実行座談会」日時：平成28年10月20日 (木曜日) 10時55分から12時00分まで 場所：南国市立たちばな幼稚園  
出席者：保幼小連携に携わっている方14名高知県HP (www.pref.kochi.lg.jp/)より引用

